

ワークショップのご案内

一般社団法人日本箱庭療法学会第 32 回大会を新潟青陵大学（新潟市中央区）にて開催いたします。今大会は、12 名の先生方にワークショップ講師をお引き受けいただくことができました。

ワークショップの形式は、講師に一任しています。コースによって、テーマに即した参加者からの事例提供を募集しています。詳細は各コース（A～L）の案内をご覧ください。

みなさまの積極的なご参加を心よりお待ちしております。

1. ワークショップ概要

日 時： 2018 年 10 月 20 日（土）9:30～12:00（受付開始 9:00）
会 場： 新潟青陵大学 1 号館 （〒951-8121 新潟市中央区水道町 1 丁目 5939 番地）
講 師： （50 音順・敬称略）

A	伊藤 良子	（京都大学名誉教授）
B	岩宮 恵子	（島根大学人間科学部）
C	岡田 康伸	（京都大学名誉教授）
D	河合 俊雄	（京都大学こころの未来研究センター）
E	川崎 克哲	（学習院大学）
F	川戸 圓	（川戸分析プラクシス）
G	北口 雄一	（北口分析プラクシス）
H	桑原 知子	（京都大学大学院教育学研究科）
I	田中 康裕	（京都大学大学院教育学研究科）
J	名取 琢自	（京都文教大学）
K	弘中 正美	（山王教育研究所）
L	山中 康裕	（京都ヘルメス研究所・京都大学名誉教授）

受 講 費：

	予約参加	当日参加
会 員	6,000 円	7,000 円
非会員	8,000 円	9,000 円

*当日参加は、定員に余裕のある場合に限り可能です。

受 講 資 格： 一般社団法人日本箱庭療法学会正会員。もしくは臨床心理士の有資格者、臨床心理学を学んでいる大学院生、臨床心理学およびその関連領域で実践的な仕事に従事されている方で、心理臨床事例に関する守秘義務を遵守できる方。

2. ワークショップ・コースのご案内

A わかりにくい箱庭表現—系統発生的な次元への接近—

講師: 伊藤 良子 (京都大学名誉教授)

内容: 本ワークショップにおいては、「わかりにくさ」と困惑を感じさせるにも拘らず、箱庭を置く者からは、相当な集中力が伝わってきた。それはこの作業が、ユングの「集合的無意識」、フロイトのいう系統発生的な次元の無意識に触れるがゆえと思われた。ワークショップを重ね、これらは、フロイトによる「属性判断」、ユングの「4つの心的機能」の非合理的な「感覚」の観点が手がかりを与えると考えるに至っている。「感覚」は、身体さらには生物学的な基盤にかかわるものである。箱庭療法においては、この心的機能を喚起するがゆえに、心理療法が困難とされた状態にも接近が可能になると言えよう。わかりにくい箱庭表現を募集いたします。ご報告いただける方は、ご連絡をお願い申し上げます。

事例提供者: 受講者の中から事例提供者を募集します。

B 無気力からの離脱に必要なものとは何なのか

講師: 岩宮 恵子 (島根大学人間科学部)

内容: 周囲の勧めで来談してきても、話題がまったく展開しないクライアントとの治療に行き詰まりを感じている人は多いだろう。主訴についての語りもほとんどなく、「好きなもの」を通路に関わろうとしても、本人から積極的に語られることもなく、面接に対しても無気力な様子にこちらの無力感ばかりが募ることもよくある。そのような状況から面接が展開していくためにはどのようなことが求められるのだろうか。このWSでは、クライアントが「好きなもの」について語るができるようになるまでに、どのような働きかけが必要だったのか、そして、その「好きなもの」の語りからクライアント自身のイメージ表現が生まれる経過で何が起こっていたのかを考えていきたい。

事例提供者: 片岡 彩氏

C 箱庭療法の実習

講師: 岡田 康伸 (京都大学名誉教授)

内容: 最近、箱庭療法の基礎をテーマにワークショップを実施してきた。今日は主催校の要請もあり、かつ実習が可能な環境にあるので、実習をしたいと思う。箱庭療法の基礎は、実際に自分で制作することであり、これが最も大切である。それが今回可能になったので、実現したい。今のところ、グループ箱庭と各個人個人の制作を試みたいと考えている。従って今回は事例はなしである。(定員 30名)

D 主体性の弱さと夢によるアプローチ

講師: 河合 俊雄 (京都大学こころの未来研究センター)

内容: 狭義の発達障害はやや減少気味であるが、対人恐ろ的な訴えをしていたり、ひきこもりであったりしても、主体性の弱さを特徴とするクライアントは増えているようである。そのようなクライアントに対して、夢によるアプローチをする利点と特徴について、事例に即しつつ解説したい。発達障害と同じように、夢に内容を限って枠を狭くすることや、夢における直接的な体験が意味を持つように考えられるので、その点も検討したい。

事例提供者: 野口 寿一氏 (発達障害傾向と引きこもりの2事例を予定)

E 風景構成法の読み方(入門編)

講 師: 川崎 克哲 (学習院大学)

内 容: 風景構成法は日本オリジナルな描画法であり、その中ではもっとも広く実施されているものであるといえよう。しかし、その実施頻度の高さにもかかわらず、それをどのように「読む」かとなると現在においても基本的な軸がほぼ示されていないのが現状であるように思われる。本ワークショップでは、風景構成法の手順から論理的、必然的に導きだされる視点から、描かれた風景構成法の絵をどのように解釈するか基礎的な軸を解説していきたい。もちろん、描かれる絵は千差万別であり、それぞれ固有性をもった個々の絵をどのように解釈するかに関しては決まったマニュアルなどはありません。畢竟、読む人の「臨床的センス」がものを言うという見解は絶対的に正しい。にもかかわらず、解釈のための「補助線の引き方」というものはある程度、その心理テスト固有の手順から論理的に取り出せるものであり、本ワークショップではこの「補助線の引き方」の基本的なラインを検討する予定である。

事例提供者: 講師自身の事例を提供します。

F 箱庭に見られる「島」の象徴性を能楽から深める

講 師: 川戸 圓 (川戸分析プラクシス)

内 容: 日本箱庭療法学会・第32回大会が開催される新潟には佐渡島がある。このワークショップは佐渡島に関わるワークショップとしたい。周知のように、佐渡島は、能楽を大成させた世阿弥が晩年に島流しにあった地である。「島」は、中心から離れ、日常性から離れ、この世的なものから隔離されている地である。それゆえに、「島」には、中心にはない周縁の豊かさがあり、非日常の力に満ち溢れ、あの世的なものに接近することで精神の純粋さが生まれ得る可能性があるとも言えよう。しかしながら同時に、中心と断絶した荒廃を招き、死をもたらす地でもありうる。世阿弥自身は佐渡島に、中心と距離を置くことによって、確かな能楽文化を育て得た。現在なお佐渡島において能楽が盛んなのは、この世阿弥によるところが多い。一方、作者不詳(世阿弥の作であるとも言われるが)の能『俊寛』において、僧都俊寛は、流された鬼界ヶ島で、自害という形で、死を迎えることになる。世阿弥の面影を心の片隅に置きながら、観世寿夫の名演である『俊寛』(全てを見る時間はないので一部になるが)を観て、「島」の二面性、そしてその象徴性を探ってみたい。なお、箱庭に「島」が表現された事例を募集しますので、事例からも「島」の二面性、そしてその象徴性を読み取っていただくと考えている。

事例提供者: 受講者の中から事例提供者を募集します。

G 学校臨床で、イメージに重きを置いた面接をすることとは？

講 師: 北口 雄一 (北口分析プラクシス)

内 容: スクールカウンセラーは、対立する二つの考えの壁にぶつかることが多い。一つは、SCが支援するのは学校で、より重要なことは学校を見立て、コンサルテーションを中心に管理職も含めて教員に働きかけ、生徒が生きる学校の変容に寄与するという考えである。もう一つは、問題を呈する生徒や保護者との面接を重視し、教員や学校もその個別性をもった生徒への理解を通して、人と関わることで自体への変容が生じうるという考えである。この二つのあり方は対極なので、お互い同士が批判も含めて複雑な思いを持たざるを得ない。そこにはその人の得意、不得意が重なっていることも多く、前者を重視するSCは個人面接を不得手と感じているだろうし、後者もしかりで、あるのは集団への働きかけの不得手感だろう。今回の分科会では、学校臨床においても面接に重心を置き、さらにイメージという視点からのアプローチを重視する箱庭療法学会に所属を置く会員が、この避けられない二つの立場の中で、どのように学校に寄与

していくかを、講師によるいくつかの事例も手がかりに、考えていただくことを目標にしたい。

事例提供者： 講師自身の事例を提供します。

H 箱庭療法の基本

講 師： 桑原 知子（京都大学大学院教育学研究科）

内 容：箱庭療法は奥深く、知れば知るほど、そこで何が起きているのだろうと興味がわく。最近、箱庭療法におけるさまざまな「関係性」に関する研究も多くおこなわれるようになり、箱庭療法に深く踏み込む研究が増えてきたように思われる。一方で、箱庭療法はそうした「研究」とは別に、あくまで心理療法のなかで採用され、生かされていく、実践的なものでもあるように思う。そこで本ワークショップでは、箱庭療法の原点に立ち返り、事例のなかでの箱庭に触れ、箱庭がどのように導入され、それが事例のなかでどのように生かされているのかを学んでいきたい。事例を募集します。どんな場面でおこなわれたものでもかまいません。

事例提供者： 受講者の中から事例提供者を募集します。

I 「小児がんサバイバー」の心理療法—箱庭・描画を中心として

講 師： 田中 康裕（京都大学大学院教育学研究科）

内 容：「小児がんサバイバー」とは、15才以下で小児がんと呼ばれる白血病や骨肉腫などの病にかかった経験のある人を指す言葉である。心身ともに未だ成熟していない段階で、がんという重篤な病に襲われ、抗がん剤の服用や放射線療法等を含む、いわゆる「強い」治療を受けることは、その後の患児の心身の発達にどのような影響を及ぼすのだろうか。むろん、そこには、それに対する家族や学校等の周囲の過剰な反応や、その反対の無関心や無配慮が及ぼす副次的な影響も含まれる。がん患者への心理療法については、まだ数は少ないものの、本学会でも論じられるようになったが、本ワークショップでは、そのような終末期医療ではなく、獨協医科大学（小児科学）の植田静氏による、小児がん治療後数年を経て、不登校等の不適応を呈した「小児がんサバイバー」の心理療法の複数事例の報告から、箱庭や描画といったイメージへのアプローチを中心に据えつつ、上記の問いについて考えてみたい。

事例提供者： 植田 静氏

J 雪のシンボリズム

講 師： 名取 琢自（京都文教大学）

内 容：地球の生活は固体・液体・気体いずれの状態にもなりうる「水」の恩恵により成り立っている。水と空気が織りなす気象は、生命を育む源であるのはもちろん、心象風景を描き出すイメージ素材としてもなじみ深いものである。なかでも雪は、東洋の季節の美「雪月花」の筆頭であるとともに、俳諧や和歌においても重要なモチーフになっている。雪景色の美しさと荘厳さ、雪が消えゆくはかなさ、雪を踏みしめて人里離れた知人を訪ねるときの寒さ、心許なさ。雪には美的、情緒的感覚を呼び覚ます力がある。しかし雪に託された象徴的意味は「美」とどまらない。大会開催の地・新潟からほど近い越後魚沼の商人、鈴木牧之は江戸時代の名著『北越雪譜』を残している。その執筆の動機は、暖かい気候に恵まれた他国の人々が雪国の過酷な生活や雪の恐ろしい側面への想像力を十分持っていないことへの反動であった。箱庭や夢において、「雪」のイメージが登場する場合も少なくない。本ワークショップでは、臨床事例の箱庭や雪に現れた「雪」（あるいは氷）のシンボリズムに焦点をあて、その根底にあるイメージをともに味わい、事例の理解に役立ててみたい。

事例提供者： 受講者の中から事例提供者を募集します。

K 箱庭療法はどうすれば身に着けられるか

講 師： 弘中 正美（山王教育研究所）

内 容： 箱庭療法はさまざまな心理療法技法のひとつですが、どのような経験・訓練・資質に基づいて身に着けられるものでしょうか。日本では、広く、自然な、しかしやや曖昧な臨床経験に基づきながら箱庭療法の専門性が成り立っていく傾向があります。この日本的な箱庭療法風土を検討することを通じて、箱庭療法を身に着けるために必要な経験・訓練・資質について考えてみたいと思います。

上記のテーマを実際の箱庭作品に基づいて検討するために、受講者には箱庭作品を提供して下さるようお願いいたします。箱庭作品はひとつであっても構いません。治療面接における作品、あるいは御自分が作られた作品、いずれでもよろしいです。色々なことを連想できる作品、よく分からないけれども印象深い作品などを歓迎します。WSで実際に使わせて頂くかどうかは、個々の方と連絡を取り合って決めさせていただきます。提供できる箱庭作品をお持ちの方は、大会事務局に受講申し込みをすると同時に私（ms11hironaka92@yahoo.co.jp）と連絡を取って下さい。

※箱庭作品をご提供いただけない場合でも受講可能です。

L 「MSSM(mutual scribble Story Making)交互ぐるぐる描き投影・物語統合法」への招待

講 師： 山中 康裕（京都ヘルメス研究所・京都大学名誉教授）

内 容： MSSM（1982、山中康裕）とは、上のタイトルに示したように、交互にぐるぐる描きを何回か繰り返して、そこにお互いに投影しあい、彩色して、最後にそれら全部を意識の糸でつないで物語を作る、という方法である。これは、アメリカのナウンバーグに始まり、イギリスのウィニコット、日本の中井久夫を経て、この形に完成した、すぐれて児童も大人もセラピーに応用できる方法である。当日は、この方法の実習を行い、ただちに、翌日から使用可能な状態にするつもりである。

受講者は、クレヨン、はさみ、スティックのり、コラージュの材料（雑誌、チラシ等）をご持参ください。また、以下の参考書をあらかじめ読んだ上で参加していただくのが望ましい（ワークショップ当日、会場でも参考書の販売を行います）。

参考書：『MSSM への招待』（細川佳博・山中康裕編著 創元社 2017）

3. ワークショップの受講申し込み

ワークショップの参加予約は、別紙「第1号通信」を参考に、以下の要領でお申し込みください。

1. WEB 申込の場合

別紙 第1号通信3頁の「4. 大会参加の申し込み」と同様右記QRコードよりお申し込みいただけます。ご希望のワークショップを選択し、**2018年6月30日(土)**までにお申し込みください。先着順での受付となりますため、定員になったワークショップから締め切らせていただきます。



郵送による申込の場合

同封の参加申込書に必要事項を記入し、**2018年6月30日(土)【必着】**で大会準備委員会へご郵送ください（第1号通信の12頁に大会準備委員会の宛名ラベルを印字しておりますので、ご郵送の際にご使用ください）。

- 同封の払込取扱票の通信欄に必要事項を記入し、必ず合計金額を記入の上、お申し込みから**2週間以内**に諸費用をお振り込みください。**お振り込みの際には、必ず参加者ご本人の名義でお手続きください。**参加申込と諸費用のお振り込みを当方で確認でき次第、予約参加手続きが完了となります。なお、振り込まれた諸費用は、事情の有無に関わらず返金いたしませんのでご注意ください。

ゆうちょ銀行

口座名：00920-0-310345

加入者名：一般社団法人日本箱庭療法学会年次大会

3. お弁当(1,000円お茶付)の予約販売を行いません。予約される場合は、「第1号通信」6頁をご参照の上、お申し込みください。ワークショップ終了後(12:00)にお渡しいたします。
4. 予約参加者には、発表論文集と名札を送付します。当日は名札を必ず持参し、直接会場へお入りください。受付は必要ありません。

4. ワークショップの事例発表申し込み

1. 希望するワークショップ・コースが事例を募集している場合にのみお申し込みいただけます。なお、事例発表は原則として会員に限ります。
2. **WEB 申込の場合**
「3. ワークショップの受講申し込み」と同様にお申し込みいただけます。「ワークショップ事例発表」のチェックボックスで「発表する」を選択いただき、発表予定題目、共同発表者を入力し、**2018年4月20日(金)**までにお申し込みください。
郵送による申込の場合
同封の参加申込書の「3.発表申込」に発表予定題目、共同発表者を記入し、**2018年4月20日(金)【必着】**までにお申し込みください。折り返し、準備委員会より連絡いたします。
3. 事例発表の申し込みが多数あった場合は、講師と相談のうえ選択しますので、ご了承ください。

5. 研修ポイントについて

日本臨床心理士資格認定協会「臨床心理士教育・研修規定別項」第2条(3)「本協会が認める関連学会での諸活動への参加」の通り、下記のポイントが付与されます。

- ・ワークショップ受講+シンポジウム参加=2ポイント
- ・ワークショップでの事例発表者には4ポイント

※名札が研修証明書の代わりになりますので、大切に保管し、ご自身で申請していただくようお願いいたします。大会参加される場合は、第一号通信「6.研修ポイントについて」をご参照ください。

一般社団法人日本箱庭療法学会第32回大会 ワークショップに関する問い合わせ・連絡先

■一般社団法人日本箱庭療法学会 第32回大会準備委員会 (主催：新潟青陵大学)

E-mail: congress@sandplay.jp

FAX: 06-6233-8529

住所: 〒541-0047 大阪市中央区淡路町4-3-6 (有)新元社内

*お問い合わせやご連絡はなるべくEメールにてお願いいたします。

*お電話でのお問い合わせには応じられませんので、ご了承ください。